

世田谷村日記

石山修武

十二月二十一日

夕刻銀座で鈴木安藤難波氏と伊藤先生の会。松崎町ストリートミュージアムのまとめをしておいた方がよい。いずれ本にする部品としてのまとめ方が良からう。

十二月二十四日 日

朝、思いたって上九一色村の廃寺へ。辿り着いてみれば、すでに富士御廟と名付けられた墓地になっていて、無住ではなく僧侶が住んでいた。計画の余地は無いなといささかガツカリして、それでも念の為に思いたいぶんをめた僧侶に声をかけた。富士一合目とおぼしき高地に人里はなれ、たった一人で修行に明暮らしているかと思いきや、ドテラ姿に胸をはだけたモモ引き姿の生臭プンプンたる人物で仲々に好感が持てる。破戒僧とは言はぬが俗人ではない。聞けば息子さんが早稲田実業高校出身という事で話しても弾み、色々と話してうちに、この人物に私の計画を持ちかけてみようの気分になり、話し始めるとこの人物がこの富峯山聖徳寺の住職と言う。二、三千坪特別な区画の霊園として分けてくれるか、と持ちかければ、アイヨ、イイデスヨの答えが帰ってきて拍子抜けしてしまう。お茶をいただき、後日再会を約して帰京。途中相模湖に寄り、T先生を見舞う。二男の住宅を依頼さ

れる。T先生は大学の知人の中ではキチンと世間がわかっている人だから、考えてみても良いなと思う。西調布N先生の地下室に寄って上九一色村の報告をして帰宅。暮れなのに忙しい一日であった。

十二月二十五日

世田谷地下会合。

来年三月十五日発行「世田谷村」を決める。正月の会合でどれ程の考えがまとまって出てくるか楽しみだ。大学に初めて来た時を思えば、研究室のスタッフは全員二十代の始まりばかりの子供だった。こちらの体力も酷使して寿命を何年か確実に縮めたが、それを思い返せば今の方がまだマシかも知れない。あんまり失望も絶望もしないで、ガキ共に何かをもう一度託してみようと思う。しかしながら、大学というのは恐ろしいところだ。毎年毎年春になると大学院に無知な羊がドーツと流れ込んでくる。こちらは年を取る、経験も増える、しかし原則的に学生は毎年入れ替るわけだから変化しないわけで、彼等の落差は開く一方なのだ。

「世田谷村」と名付けたプロジェクトを幾つか同時に走らせてみる。全部が上手くゆくとは思えぬが、全滅するとも限らないだろう。